



想像力を働かせること 視点を変えること

副校長 家本 咲子

4月初めの学校は緊張や不安がところどころに感じられますが、1ヶ月経つ頃には新しいクラスや先生にも慣れ、校庭で走り回る姿や授業中に元気に発言する姿が見られるようになるのが毎年のことです。今年度は、本校の新しい試みとして全校教科担任が始まりました。例年よりも、一つ慣れなくてはならないことが増えたということです。学年の子供たちをみんなで見守る、チームとしての動きはこれまでよりも強化されることを期待しているところです。チームで子供たちを見守る最大のメリットは、さまざまな視点から子供たちの良さを引き出すことができることにあります。子供たちの良さ引き出すだけではありません。やる気が見られない時、少し悩んでいる様子の時、たくさんの大人の目で子供たちの身に起きた出来事を共有し、たくさんの大人の手を差し伸べ助けることができます。

6年生は国語で「帰り道」、5年生は「銀色の裏地」という物語を学んでいます。6年生「帰り道」では、人には自分が抱く印象とは違う側面をもつ人もいる、視点を変えれば違う見方が生まれるということ学びます。人は誰でも表に出ている姿が全てではない。その裏にはもしかしたら周囲は気が付いていない「何か」があるかもしれない、と想像する力はコミュニケーションスキルの一つと言えます。想像力を働かせて、友達の思いに寄り添うことが円滑な人間関係の構築に繋がっていきます。5年生「銀色の裏地」はクラス替えをして友達と一緒にいられず不満を抱えた女の子が、新しいクラスでできた友達によって考えが変わっていくお話です。その中にこんな言葉があります。「すべての雲には銀色の裏地がある。曇っていても雲の上には太陽があるから、雲の裏側は銀色に輝いている。だから、銀色の裏地を探そう。困ったことがあっても嫌なことがあってもいいことはちゃんとあるんだって。」素敵な言葉ですね。生きていればいろんなことがあります。当然、良いことばかりではありません。そんな時、「困ったことがあっても嫌なことがあってもいいことはちゃんとあるんだって」と、前向きになれるような出来事を探したり、良くなる方法を自分で考えたりする力も、ぜひ付けていきたい力です。子供たちはこうして、授業の中で大切なこと、付けていかななくてはならない力を学んでいます。

視点を変えて物事を捉える力やマイナスをプラスに変えようとする力は、子供たちの世界を広げる助けになります。凝り固まった印象や、人から伝え聞いたエピソードにとらわれて、狭い世界でとどまることなく、「やってみたら楽しいかもしれない」「話してみたら気が合うかもしれない」と、どんどん自分の世界を広げていけるよう子供たちをできる限り応援しています。

4月、教室を回っていると、担任の先生がとても良い話をしている場面に遭遇しました。どうやら、友達に悪口を言われて相談をされた後のことだったようです。

「5秒以内に換えられないことは、人に言わない」

まさに、そうです。人の見た目、容姿等についての悪口は、間違いなく相手を傷つけます。この先生の言葉を子供たちはとても真剣に受け止めていました。「この言葉は、相手がどう思うかな」「これは相手にとって嫌なことかな」と、想像力を働かせる。一人ひとりが、想像力を働かせ、相手の思いに寄り添うことができるような、素敵な学校にしていきたいです。

子供たちが登校する前の校庭です。休み時間は元気な声が聞こえてきます。



1年生は春の詩を学びました。元気よく音読しています。

